

# 日本銀行金融研究所 貨幣博物館 所蔵「和同開珎」目録

## 解題

### 1. はじめに

日本銀行金融研究所貨幣博物館では和同開珎を全310点所蔵しており、うち309点が銭幣館コレクションから引き継がれた資料、1点(個体ID263)は甲賀宣政氏が収集整理していたものである。

銭幣館コレクションを母体とする当館所蔵貨幣は、整理の過程で順次「登録簿」(日本銀行内部管理のための台帳)を作成してきた。和同開珎の登録簿は、田中啓文氏に師事した郡司勇夫氏\*が作成にあっている。当館の登録簿は、田中氏の分類の考え方を基本的に引き継いだ形で作成されていることが、雑誌『銭幣館』の田中啓文氏の論文などから確認できる。なお、和同開珎の登録簿の作成は1962年である。

以下、当館登録簿の分類方法および計測データについて述べる。また、あわせて本解題で、当館所蔵の銭幣館拓本資料における分類も紹介することとしたい。

\*郡司勇夫氏 - 1910年～1997年。田中啓文氏に師事し、日本銀行が田中啓文氏のコレクションを譲り受けたことに伴い、日本銀行へ入る。『図録 日本の貨幣』(東洋経済新報社)の出版、貨幣博物館の開館に携わる。日本貨幣協会名誉会長。

### 2. 郡司勇夫氏による当館登録簿分類

#### (1) 当館登録簿大分類について

郡司勇夫氏による当館登録簿では、和同開珎全310点について、銀銭か銅銭か、鑄造が古鑄か否かにより、大きく4分類し、次のように特徴を解説している(以下、要点を抜粋)。

#### 和同開珎銀銭(古鑄) Aアス1 ... 34点(当館所蔵点数、以下同様)

径寸、厚味、重量共にやや不統一な点があり、文字製作共に古拙。「和」の口の縦画が下つぼまりになっている。異例はあるが多くは不隸開(「開」の字が楷書体一筆者注)。

内郭の大きさは広・狭の2種。文字には繊細な変化が多く、径寸、重量、厚みなどの相違点から鑄造技術の拙劣さと、手工業的な小規模な鑄造であったことが伺える。

#### 和同開珎銅銭(古鑄) Aアス2... 10点

に同様。

#### 和同開珎銀銭 Aアス3 ... 7点

古鑄品に比べ銭容整い、文字に個体差があまり見られない。「和」の口が古鑄品と同様両つぼまり、「同」の第一、二画がすそ広がり。「珎」の第6画が肩上がり気味。

## 和同開珎銅錢 Aアス4 ... 259点

古鑄錢に比べ、錢容整い、文字に個体差も比較的少ない。「古和同様」の7点以外は「和」の口が古鑄錢と異なり矩形気味。全て隸開（「開」の字が隸書風一筆者注）。

### (2) 当館登録簿小分類について

細分類については、登録簿の分類解説を第1表に掲げた。近世以来古銭家により様々な分類がなされてきたが、基本的な分類は既にある程度集約されている。当館登録簿の小分類も、大分類で掲げた事項以外については、それらと大きな隔たりはない。

なお登録簿には、「新和同」銅錢の細分類に関し、「収集界で「新和同」と呼ばれるものは鑄造期間が長く、細別するのは限りがないため、第1表の分類にとどめた」旨注記がされている。例として掲げられている第1表以外の「新和同」の細分類は以下の通りである。

「背広郭」…裏面の郭が広く、やや広穿。

「背凸郭」…裏面の郭が常品に比して凸出している。

「背異制」…裏面の郭の状態が、万年錢や神功錢など和同錢の後に出された諸錢の郭の状態に似ている。

「最大様」…極めて大形、厚肉のもので保存唯一品の異種。

「円頭開」…開字の上部が円味を帯びている。

## 3. 計測データの分析と古銭学分類の整合性

### (1) 計測方法

貨幣の計測方法については、奈良国立文化財研究所が平城京左京一条三坊の発掘調査で出土した銅錢の測定に適用した測定方法（奈良国立文化財研究所学報第23冊『平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査』1974年）を準用した。

$$\text{外縁外径 } G = (Ga + Gb) / 2$$

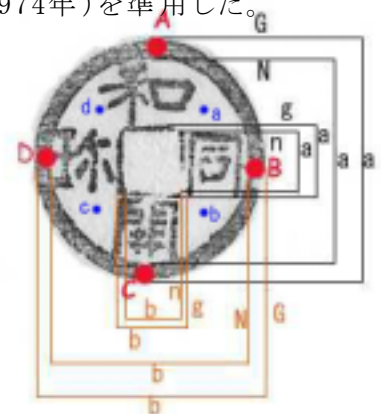
$$\text{外縁内径 } N = (Na + Nb) / 2$$

$$\text{内郭外径 } g = (ga + gb) / 2$$

$$\text{内郭内径 } n = (na + nb) / 2$$

$$\text{縁厚 } T = (A + B + C + D) / 4$$

$$\text{内厚(文字面厚) } t = (a + b + c + d) / 4$$



また縁幅比・孔径比については岡田茂弘「和同開珎銀錢について」（『郵政考古紀要21』1995年）を準用した。

$$\text{縁幅比} = [(G - N) / 2] / N \text{ (外縁の直径に対する外縁の幅)}$$

$$\text{孔径比} = n / N \text{ (外縁の直径に対する内郭の方孔の大きさの比率)}$$

第1表 和同開珎 細分類 (郡司勇夫氏による当館登録簿より)

材質	種別	特徴	当館 所蔵点数
銀	きょうせんだいじ 狭穿大字	・狭穿 ・文字潤大。特に「珎」が狭穿小字に比べ大きい。	4
銀	きょうせんしょうじ 狭穿小字	・狭穿 ・文字が「狭穿大字」に比べ小さい。	18
銀	まさて 笹手	・狭穿 ・各字縦画末端が笹葉のように下すばみ。笹書ともいう。 ・稀少	3
銀	こうせん 広穿	・広穿のため、文字が狭穿よりやや小さい。	4
銀	こうせんれいかい 広穿隸開	・広穿 ・「開」が隸書風(隸開)。	5
和同開珎銀錢(古鑄) 小計			34
銅	きょうせん 狭穿	・狭穿 ・文字が比較的大きい(個体ID39のような小字のものもある)。	5
銅	まさて 笹手	・狭穿 ・各字縦画末端が笹葉のように下すばみ。笹書ともいう。	1
銅	こうせん 広穿	・広穿 ・文字が比較的大(やや小さいものもある)。	2
銅	こうせんれいかい 広穿隸開	・広穿 ・「開」が隸書風(隸開)。 ・文字がやや小さい。	2
和同開珎銅錢(古鑄) 小計			10
銀	こわどうよう 古和同様	・広穿 ・「開」が隸書風(隸開)。 ・「和」の口が下すばみ。 ・「珎」の第6画が肩上がり気味。 ・「同」の縦画が開き気味。 ・古和同に似通っている点があるがやや製作精美。 *収集界では隸開和同と区分されているが、誤解されやすいため「古和同様」とした。	3
銀	こわどうようへいこ 古和同様閉戸	・古和同様に同じであるが、「開」の隸書風部分を造型後に故意に修正したもの(古和同の不隸開にならったものと考えられる)。 ・稀少	4
和同開珎銀錢 小計			7
銅	こわどうよう 古和同様	・「開」が隸書風(隸開)。 ・「和」の口が下すばみ。 ・「珎」の第6画が肩上がり気味。 ・古鑄錢に似通っている点があるがやや製作精美。 *収集界では隸開和同と区分されているが、誤解されやすいため「古和同様」とした。	6
銅	ふつうひん 普通品	・製作精美 ・「和」の口がやや横長(古和同、古和同様と異なる)。 ・天平以降のものとされ「天平和同」とも。	206
銅	しょうちん 小珎	・「珎」が他3字に比し小さい。 ・「珎」第6画が内郭に接するのが通例。	11
銅	ちようちん 長珎	・「珎」の第7画が特に長い。 ・「開」の門の縦画がやや開き気味。 *従来末期のものとして見られていたが、S31年群馬県出土のものは精美であり、天平期のものとしてよいであろう。	4
銅	こうわ 降和	・「和」の第3画がやや短い、第5画がやや長い、口がやや内郭寄りに下がる。	7
銅	きよじ 巨字	・4字とも巨大。「潤字」ともいう。 ・製作は不精美。 ・稀少	3
銅	よつはね 四跋	・「和」の第3画、「同」の第2画、「開」の第6画、「珎」の第7画の末端が跳ねている。 ・潤縁 ・4文字共小さい。 ・稀少	7
銅	みつはね 三跋	・「和」の第3画、「同」の第2画、「珎」の第7画の末端が跳ねている。 ・細縁 ・文字は大きい。	2
銅	のぎ 朶	・「和」第2画が肩上がり気味。 ・「和」第5画がやや長く、口が幅が狭く大きい。 ・稀少	11
銅	かつせんしょうじ 潤縁小字	・潤縁 ・文字は小さい。 ・四跋に似ているが、跳ねていない。	2
和同開珎銅錢 小計			259
合計点数			310

\* 外縁外径は製作の仕上工程での研磨や、使用上の摩滅があるため、同じ銭範や鑄型を用いても個体差がある。そのため外縁内径をあわせて計測した。

\* なお、重量以外は平均値を採っているため各値小数点第3位を四捨五入した値を目録に掲載した。

## (2) 計測データ 大分類

### 第2表 4分類の計測値比較

注) 二連のもの、破片については平均値には含まれない。そのため上記表内の点数は目録上より少ない。

平均値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	23.97	19.23	0.12	7.45	5.78	0.30	1.68	0.95	5.69
古銅	10	24.25	19.32	0.13	7.53	6.17	0.32	1.61	1.01	4.16
後銀	7	24.62	20.55	0.10	8.22	6.80	0.33	1.56	0.73	4.91
後銅	252	24.52	20.59	0.10	8.08	6.38	0.31	1.36	0.55	3.02
全体	302	24.46	20.40	0.10	8.00	6.31	0.31	1.41	0.61	3.40

最小値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	22.68	18.03	0.09	6.53	4.55	0.23	1.31	0.36	2.79
古銅	10	22.95	18.70	0.09	6.72	5.03	0.27	0.93	0.68	2.85
後銀	7	23.92	20.13	0.08	7.83	6.19	0.31	1.40	0.58	3.96
後銅	252	22.32	18.57	0.05	7.28	5.28	0.27	0.88	0.25	1.57
全体	302	22.32	18.03	0.05	6.53	4.55	0.23	0.88	0.25	1.57

最大値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	25.16	20.52	0.17	9.05	6.94	0.34	2.07	1.50	7.27
古銅	10	25.02	20.09	0.16	8.38	6.89	0.35	1.98	1.48	5.79
後銀	7	25.69	21.52	0.11	8.53	7.12	0.35	1.68	0.84	5.54
後銅	252	25.98	21.60	0.16	8.90	7.27	0.38	2.22	1.35	6.25
全体	302	25.98	21.60	0.17	9.05	7.27	0.38	2.22	1.50	7.27

登録簿の大分類(4類)の平均・最小・最大値を第2表に掲げ、各個体の計測結果をグラフA~Dに示した。

これらを見ると縁厚・内厚、量目については、従来言われているように、銀・銅銭とも古鑄の方が厚みがあり、重い。外縁・内郭の値についても、古鑄の銀・銅銭は、後鑄のものに比して小さい。

こうした計測結果をみても、後鑄のものは、古鑄に比べ縁厚・内厚が薄くなるなど銭容が整っており、鑄造技術が進歩していることが窺われる。特に銅銭については後鑄の内厚が古鑄の約半分となっている。

なお、試験的に当館所蔵寛永通宝の内厚を計測したところ、古寛永4種×5点計20点の平均が0.55mm、新寛永2種×10点計20点の平均が0.60mmであり、和同開珎後鑄銭の段階で既に銭貨鑄造技術は一定の水準に達していたと考えられる。

なお、「古和同様」についてみると、後鑄の銀銭は、全て「古和同様」または「古和同様閉戸」であり、前述の通り、縁厚・内厚や量目などの計測結果（平均値）が古鑄銀銭と異なることを示している。また「古和同様」銅銭の計測結果は「(3)計測データ-小分類」で示しているが、縁厚・量目の平均値はそれぞれ1.31mm、2.87gと、古鑄銅銭と明らかに異なり、後鑄銅銭に近いものとなっている。

### (3) 計測データ 小分類

小分類の計測データの平均値は第3表にまとめた。種類により、計測データに多少の傾向が認められるが、その傾向が示す意味が、鑄造地や技術等の相違によるものであるかどうかは今後の課題である。

#### ・古鑄：狭穿・広穿

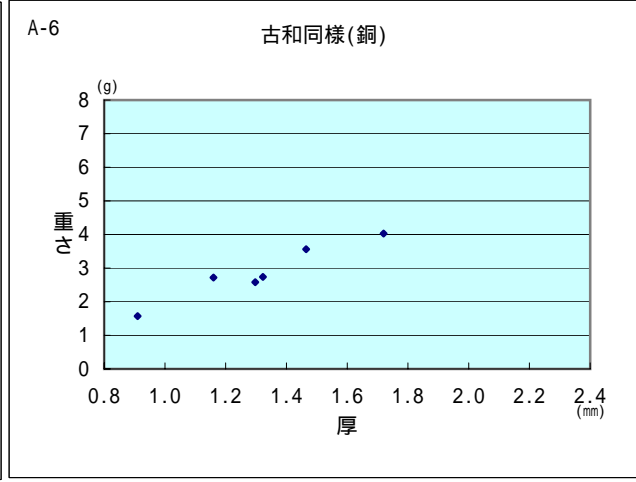
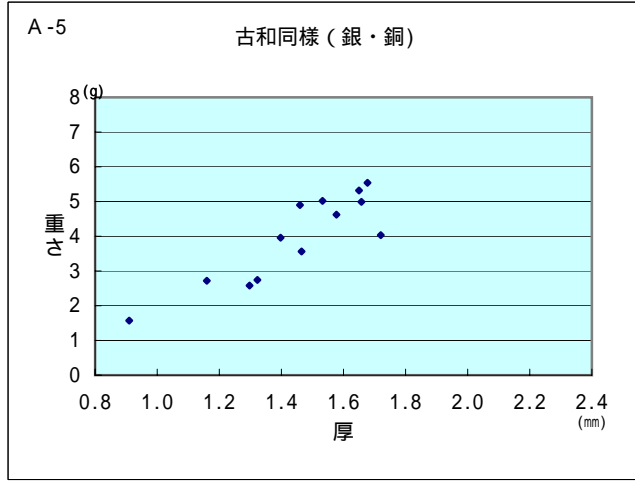
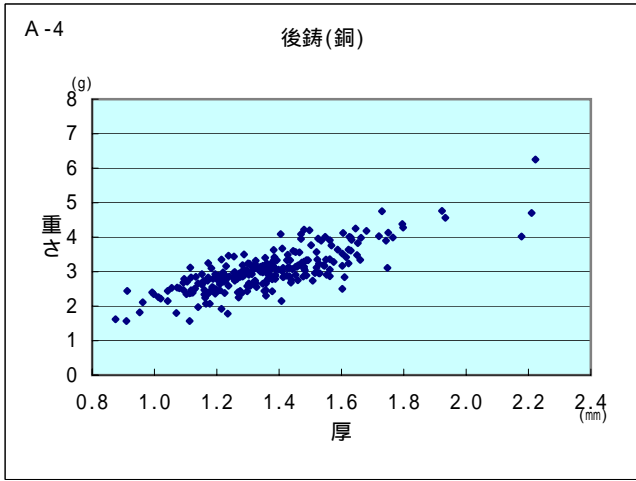
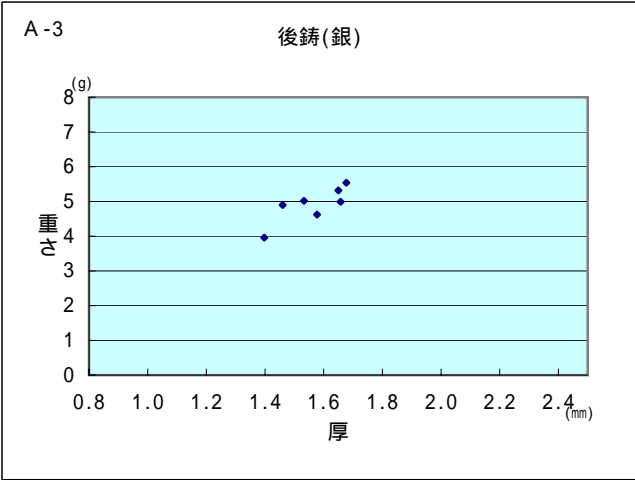
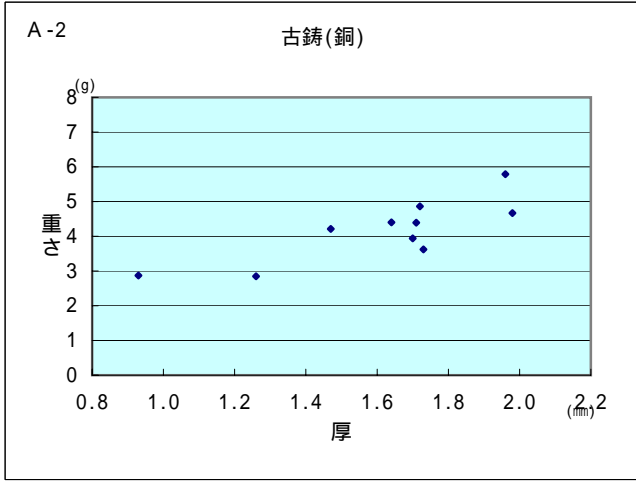
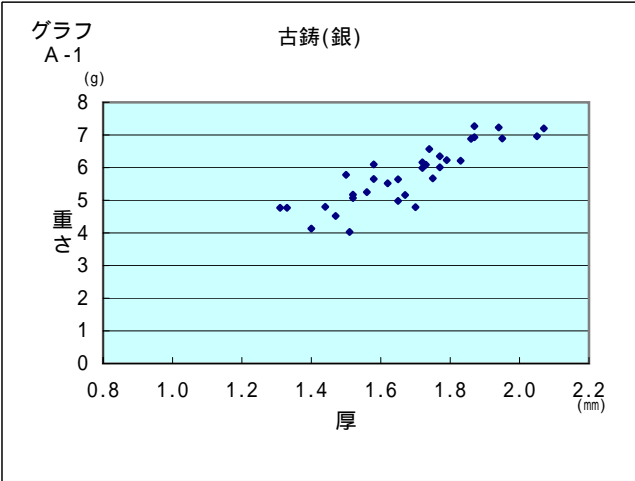
古鑄の銀銭・銅銭のなかで狭穿・広穿と分類されているものは、第3表にあるように孔径比の平均が狭穿0.29～0.30、広穿0.33～0.35と計測値上で、分類の妥当性を示しているように見える。

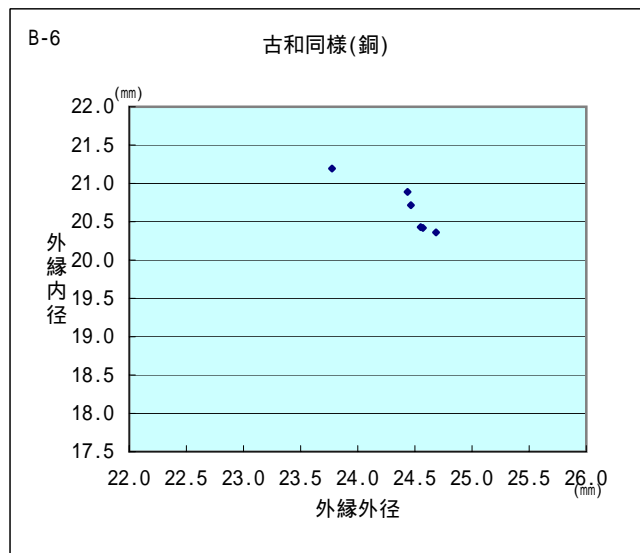
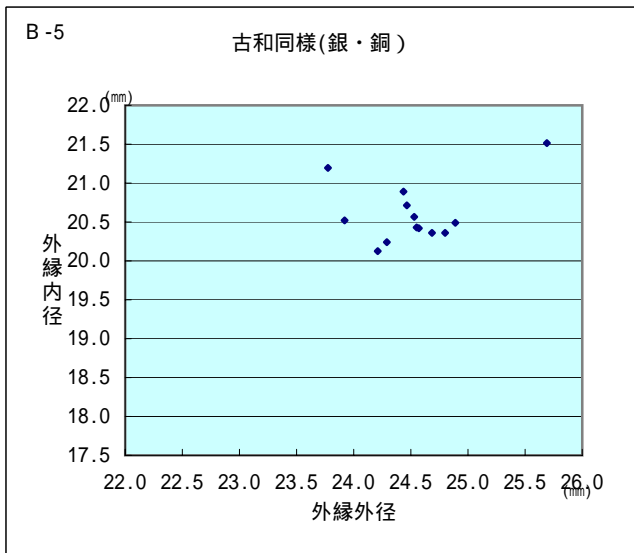
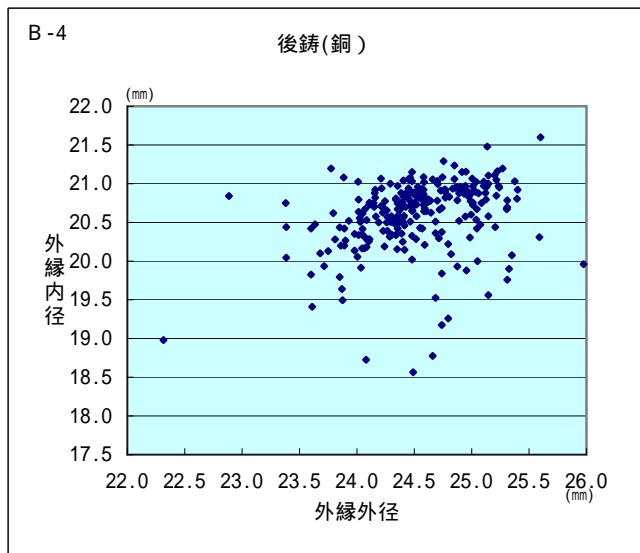
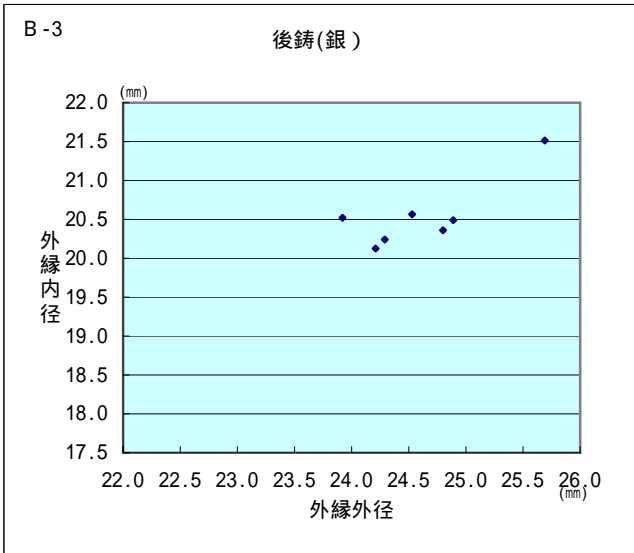
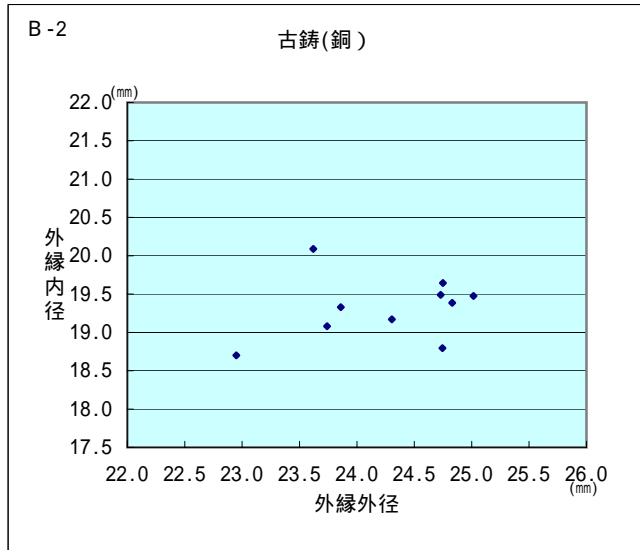
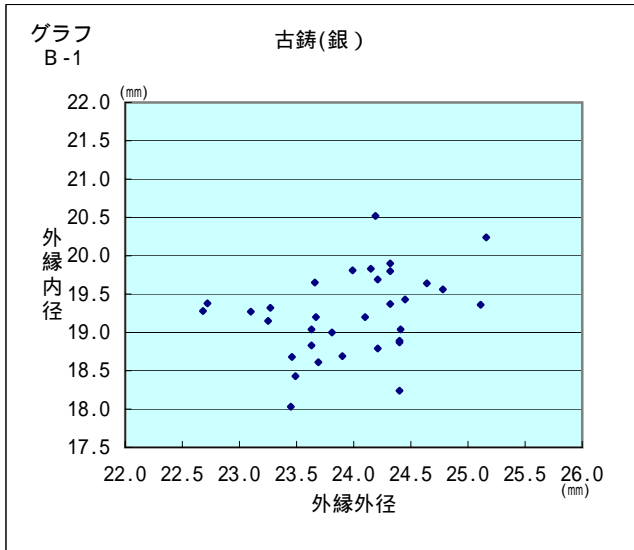
しかし、内郭内径が狭穿の平均値が5.5mm前後、孔径比が約0.29であるのに対し、個体ID13・39などは狭穿と分類されているが、内郭内径約6.5mm、孔径比0.33と、古鑄の広穿に分類されて然るべき計測値を示している。登録簿の古銭学的分類を一部再検討する必要もあろう。

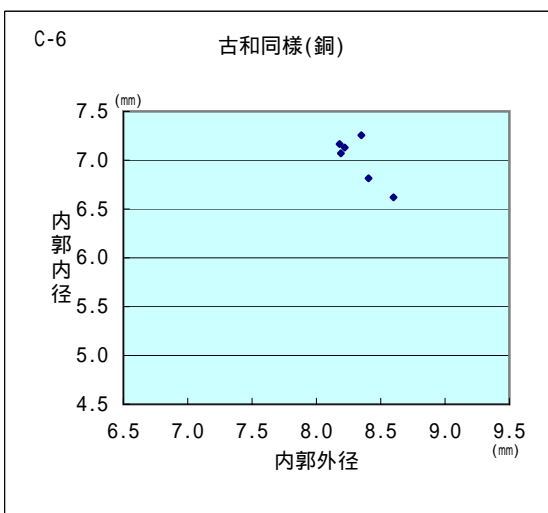
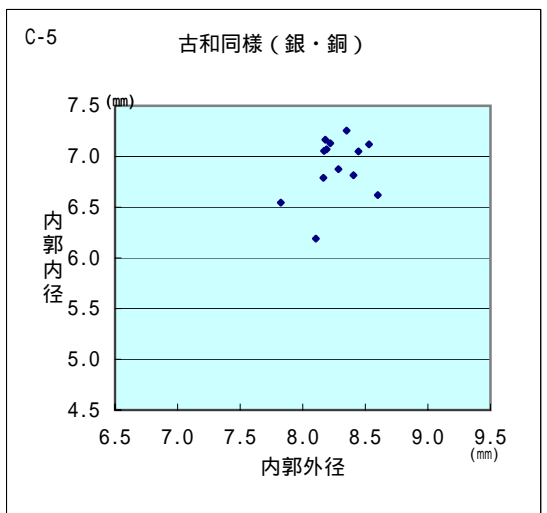
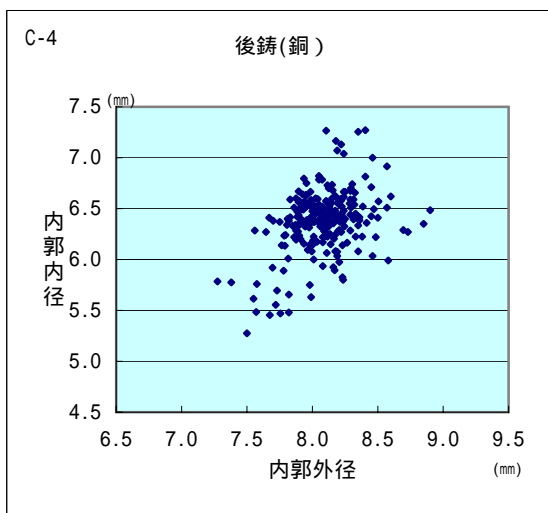
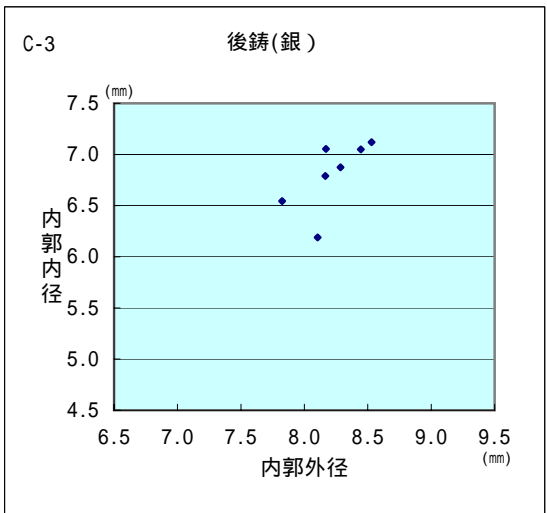
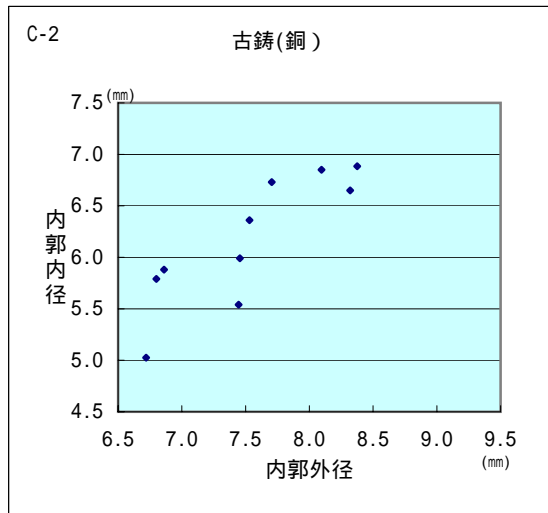
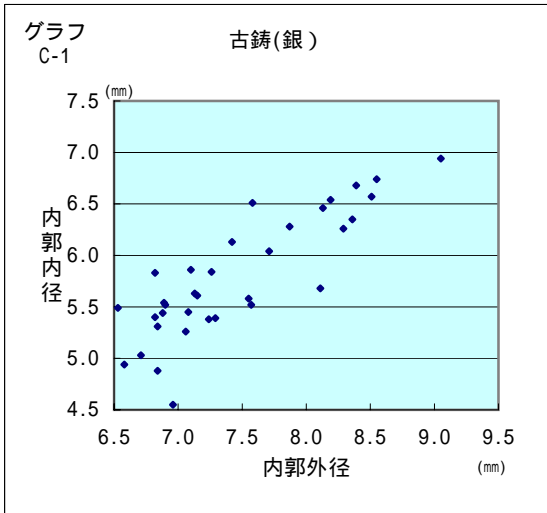
#### ・後鑄：四跋・禾・潤縁小字

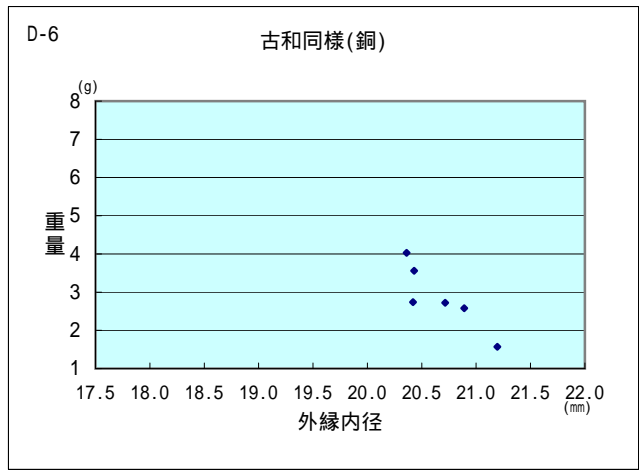
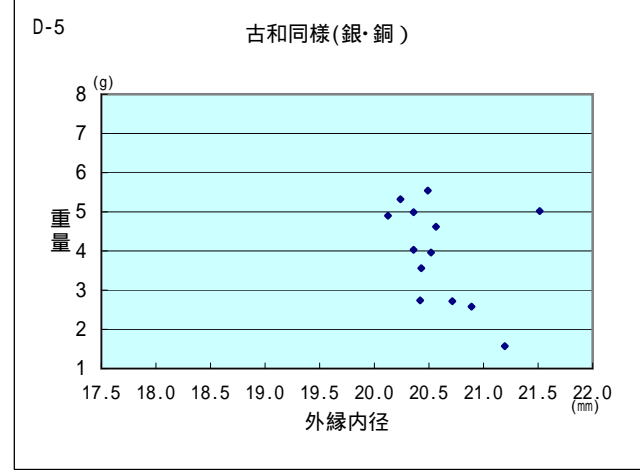
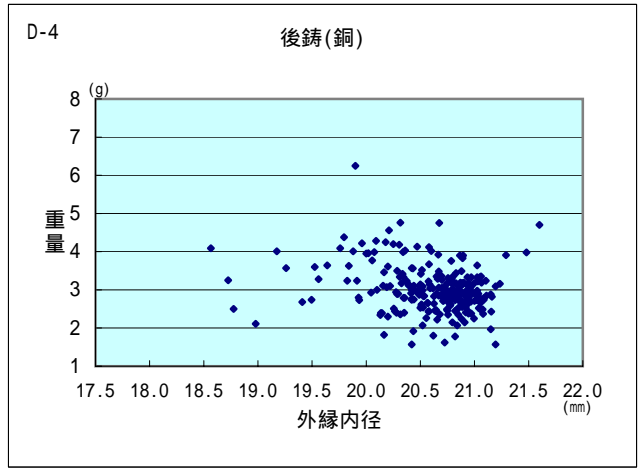
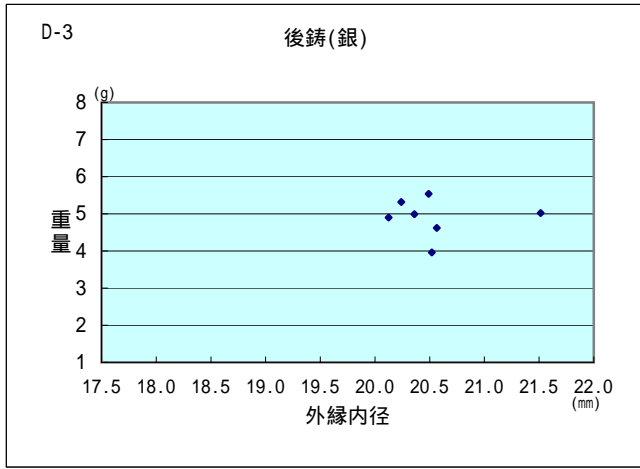
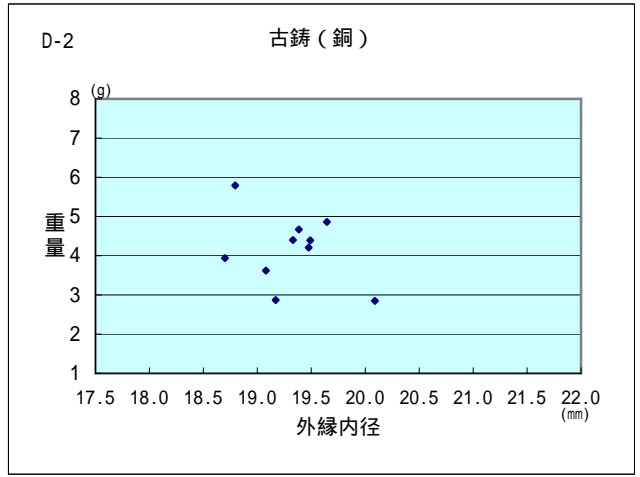
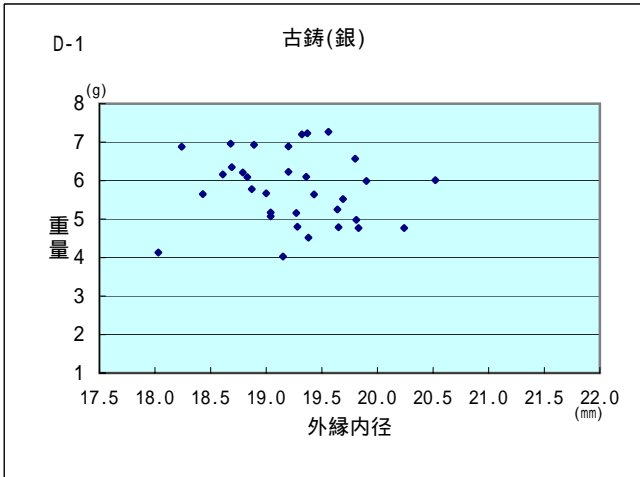
後鑄の銅銭で分類されているこれらはいずれも、縁幅比平均が0.13以上で潤縁であった。それぞれ字体による分類であり、計測による銭種との関係は明確にはし難いが、後述[補足-1]に触れる和同開珎の成分分析結果によると、これら潤縁のものは錫に比して鉛を多く含有している。同論文では、潤縁の和同開珎は晩鑄のものと考えられてきており、銭種分類と分析結果にはある程度の相関性を認めることができる」と述べられている。

成分分析についてはサンプルの数が限られていたため、今後更なる分析が必要であろう。









第3表 細分類の平均値

	細分類	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	狭穿大字	4	23.44	19.23	0.11	7.04	5.49	0.29	1.70	1.18	5.91
	狭穿小字	17	24.01	19.09	0.13	7.19	5.54	0.29	1.70	0.93	5.76
	笹手	3	23.67	18.77	0.13	6.97	5.41	0.29	1.70	1.08	5.92
	広穿	4	24.70	19.98	0.12	8.51	6.58	0.33	1.60	1.01	5.86
	広穿隸開	5	23.83	19.41	0.12	8.17	6.47	0.33	1.65	0.71	5.02
古銅	狭穿	5	24.09	19.05	0.13	7.20	5.76	0.30	1.61	1.07	4.12
	笹手	1	24.83	19.39	0.14	6.80	5.79	0.30	1.98	1.17	4.67
	広穿	2	24.19	19.87	0.11	8.01	6.69	0.34	1.49	0.88	3.86
	広穿隸開	2	24.44	19.40	0.13	8.24	6.87	0.35	1.56	0.94	4.31
後銀	古と同様	4	24.33	20.34	0.10	8.19	6.68	0.33	1.55	0.78	4.93
	古と同様閉戸	3	25.01	20.81	0.10	8.26	6.97	0.33	1.59	0.67	4.88
後銅	古と同様	6	24.41	20.67	0.09	8.32	7.01	0.34	1.31	0.47	2.87
	普通品	201	24.52	20.67	0.09	8.09	6.41	0.31	1.34	0.53	2.95
	小珎	11	24.46	20.72	0.09	8.13	6.35	0.31	1.31	0.51	2.91
	長珎	4	24.31	20.40	0.10	8.26	6.27	0.31	1.33	0.59	3.18
	降和	7	24.35	20.71	0.09	7.96	6.39	0.31	1.35	0.62	2.91
	巨字	3	24.76	21.02	0.09	8.13	6.35	0.30	1.80	0.87	3.80
	四跋	7	25.05	19.70	0.14	7.79	5.79	0.29	1.63	0.61	3.78
	三跋	2	23.80	19.72	0.10	7.33	5.78	0.29	1.29	0.58	2.74
	禾	9	24.39	19.48	0.13	7.95	5.95	0.31	1.44	0.77	3.66
	潤縁小字	2	25.46	20.11	0.13	8.11	5.95	0.30	1.94	0.86	4.80
全体の平均		302	24.46	20.40	0.10	8.00	6.31	0.31	1.41	0.61	3.40

#### 4. 当館所蔵資料の古銭学的分類の変遷

##### (1) 当館登録簿の分類と「古和同」「新和同」との関連

以上のように登録簿では、古鑄か否か、材質が銀か銅かにより4区分され、収集界での「古和同」「新和同」という名称は付されていない。ただし、登録簿中の解説では、「収集界での古和同」に該当するものは、大分類のうち①②(古鑄)全点と、③④のなかで「古和同様」、「古和同様閉戸」と細分類(第1表)されているもの(つまり③は全点、④のうちの6点)である、と付記されている。

一般に、「古和同」(ほぼ当館「古鑄」に該当)とされているものは不隸開(「開」字が楷書体)で、「新和同」(ほぼ当館「後鑄」に該当)とされているものは隸開(「開」字が隸書風)とされている。また新和同の銀銭は存在しないとされている。

当館分類において、古鑄ではない(つまり後鑄の)銀銭が分類されているのは、「古和同様」分類の存在による。「古和同様」は、後述するように、いわゆる「新和同」の銀銭として分類されているわけではない。

ここで「古和同様」と分類しているものは、「開」が隸書風で、古鑄銭に似通っているがやや製作精美なものであり、収集界で「隸開和同」と称されているものである。後鑄のもの、あるいは「新和同」とされているものが全て隸開であるため、「隸開和同」の呼称は、不適格で

誤り易い」として「古和同様」\*という名称を用いている。また、隸開であった部分を真書の「開」に故意に修正したものが3点みられるとし、これを「古和同様閉戸」と称し、「古鑄銭の不隸開に倣ったものであろう。」としている。

①②のなかにも隸開(広穿)のものが計8点みられるが、これらは古鑄に分類される。これは③④の古和同様の隸開は第1表で示したように「古和同に似通っている点があるがやや製作精美」なものである一方、①②に分類される隸開は字体が隸開であるが、鑄造技術は他の古鑄銭と同じであることによる。

\*なお「古和同様」は、後述するように田中啓文氏の命名による。

## (2) 郡司勇夫氏の見解

当館登録簿の分類は郡司氏によるものであるが、郡司氏の見解を資料と紐付けて公に記したものととして『図録日本の貨幣』第1巻(東洋経済新報社、1972年)の図版解説があげられる。

この図版解説では、和同開珎全体を「初期のものは収集界で「古和同」と呼ばれている」とした後、「和同開珎銀銭(古鑄)」「和同開珎銅銭(古鑄)」を紹介し、「和同開珎銅銭(後鑄)」の項で「後鑄の和同開珎は収集界で「新和同」と呼ばれる。」として、古鑄の銀・銅銭と後鑄の銅銭の3種類に分類している。同書には当館所蔵の和同開珎19点の写真が掲載されており、そのうち当館登録簿分類での「古和同様」銀銭の写真が2点(個体ID46・49)、銅銭が1点(個体ID52)掲載されているが、これらは登録簿と異なり古鑄に分類している。

一例をあげると、個体ID46について「「開」字が隸書風になっているが、銭体がやや整い、「新和同」と呼ばれる後鑄のものに似ている。」と解説しながらも、古鑄に分類している。

また同氏の著書『日本貨幣図鑑』(東洋経済新報社、1981年)では、この古和同様について次のように明確な見解を述べている。

「銀銭 (中略)これ(本目録上「古和同様」一筆者注)を収集界で「隸開和同」とし、一部では古和同の範疇としているが、筆者はむしろ新和同にすべきものと思っている。この隸開和同の類には製作時に「開」字の部分を「不隸開」に修正したものが稀に存在している。隸開和同は裏面の銭容からも古和同と相違していることが認められるものである。」

「銅銭 (中略)これ(本目録上「古和同様」一筆者注)は新和同に属すべきものであるが、銅質は古和同に近いものであり、製作の上で中間的なものといえよう。」

つまり郡司氏は、「古和同様」(および「古和同様閉戸」)を古和同・新和同の中間的なものと捉えていた。しかし強いて分類するのであれば、新和同に近いであろうとの見解を当館登録簿および『日本貨幣図鑑』で示したものである。

### ( 3 ) 田中啓文氏の見解 ～ 『錢幣館』より

田中啓文氏も古和同について詳細に述べた最後の論考「鑑定上からみた古和同銭の鑄造年代」(『錢幣館』11号、1951年)において、和同開珎分類の見解を述べており、その見解は郡司勇夫氏による当館登録簿にも反映されているので簡単に紹介する。

氏は同論考で、古和同(銀・銅)は「帯黒暗褐色、見た感じはねばりのある<sup>かね</sup>金、製作は渾重・朴納」、新和同(銅のみ)は「いわゆるカラカネで中には帯灰白色のものもあるが「銭特有の<sup>かね</sup>金」である、製作は軽妙・整然」とまず大きく分類をしている。

その上で、「古和同様」について、項を改め当目録銀銭個体ID49(『錢幣館』ではC-6)と銅銭56(『錢幣館』C-5)の拓本を掲げ、「鑄銭技術に進歩した点は認められるが手法もく銅銭については>銅質も古和同の系統」(<>内筆者)であるとしている。しかし、鑄造技術については「格段の進歩が認められる」と評価し、古和同銭とは大きく区別している。「隸開和同」の名称については、古和同の隸開(広穿)とは区別が必要との見解からも、批判的な書き方である。この論文では記されていないが、「古和同様」と命名し、郡司氏も当館登録簿において引き継いでいる(郡司勇夫氏「私の見た錢幣館主田中啓文先生第20回」『ポナンザ』1972年6月号)。

ここで拓本に掲げられている当目録個体ID49(『錢幣館』C-6)は、先述の「古和同様閉戸」であり、これについても『錢幣館』では「隸開をわざわざ不隸開に改修したもの」「母銭で銭形を印した銭型の「開」字をキリのように先のとがったものでホジクって改修して、その銭範で鑄造されたものである。」としている。

なお、和同開珎の分類については、常にその鑄造年代と共に議論されてきたが、田中氏は、古和同銭を和銅元年以前に鑄造されたもの、この隸開(登録簿上「古和同様」および「古和同様閉戸」)は和銅元年鑄造とし、古和同銭と新和同銭との中間的なものとして独立させ、鑄造期を画している。

ただし和同開珎の鑄造年代については飛鳥池遺跡の発見などにより、7世紀後半の銅銭の実態が解明されつつあり、初期貨幣研究は新たな研究段階へ入った(古代銭貨研究史については、松村恵司「日本初期貨幣研究史略:和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」金融研究第24巻第1号、2005年3月に詳しい)。そのため、前掲田中啓文氏の論文の年代に関する見解について、ここで議論するものではないが、同氏が古和同と古和同様について鑄期を区分していたことを記しておきたい。

### ( 4 ) 錢幣館拓本資料の分類

当館では錢幣館所蔵貨幣の主な貨幣を拓本にとったとみられる拓本資料を所蔵している(現在整理中)。これは「錢幣館」と印刷された和紙に拓本が付されたもので、綴られておらず、奥付等もないため、当資料の作成年は不明である(全丁数183うち9丁が和同開珎の拓本)。

和同開珎については計147点の拓本が付されており、一部拓本の側に「外○点」と書き込まれた点数を合計すると248点となる。さらに、欄外にメモされた点数(第4表下段参照)6点を合わせると254点となり、この資料を作成した時点で田中啓文氏が所蔵していた和同

第4表 錢幣館拓本資料分類と当館所蔵資料

錢幣館拓本分類	点数	当館所蔵	個体ID
銀錢(当館登録簿 古鑄)	29	26	1~4,6~12,14~18,20,25~30,32~34
銅錢(当館登録簿 古鑄)	9	6	36,38,40~43
銀錢(当館登録簿 後鑄)	8	8	13,45~51
<b>以下すべて銅錢</b>			
無記入(当館登録簿古と同様)	6	5	52,54~57
「銅色古和同二類入 新和同二見エス」	2	2	39,207
「銅色古和同二類入」	8	8	53,206,208~213
「新和同第一期」	5	5	81,82,266,270,271
うち「孔方鑑」1点 うち「小珍」2点 「外一期、中、未品 三十品 背長郭ヲ含ム」			
新和同「第二期」	3	2	151,159
「外三十品」			
「降和」	1	1	279
無記入(「降和」と思われる)	5	3	280~282
「和字離隔」	1	1	284
「細字」	2	2	195,283
「外一点」			
新和同「第三期」	2	0	
「外三十一一点」			
「背含円郭」	1	0	
「薄肉」	1	1	185
「長珎」	5	3	275,276,278
無記入	3	3	199,214,288
「巨字」	1	1	286
「神功座力」	3	3	192,204,261
「隆平座力」	1	1	259
「富寿座力」	1	1	287
「異制」	5	5	200~203,205
無記入(ハネ和同)	9	8	289,291~297
無記入(禾和同力)	11	8	299~301,303~306,309
「厚肉」	1	1	310
「参考品」			
「鑄放」	3	3	245,246,285
「鑄線」	4	4	218,220,223,224
外六品			
「重文」	2	2	227,228
「背ズレ」	2	2	196,198
「捺痕」	2	2	229,230
「削品 異郭」	3	3	235,236,237
「外四ハネ センベン ー」			
「串痕」	1	1	238
「外一」			
「折レ口ニ金粒ヲ見ル」(銀錢)	1	1	22
二連	5	5	247~251
「火葬骨壺ヨリ出ス」	1	0	
欄外「外輪側口ク口痕ノモノ」	4		
「盃形文」	1		
「和同背平板目ノモノ」	1		
合計	147	127	

(注)「」で囲った部分は拓本に書き込まれていたもの。分類の書き込みが無かった拓本については、当館登録簿分類と照合し、可能なものについて当館登録簿分類名称をもとに補足した。

開珎全点とも考えられるが定かではない。

この和同開珎の拓本と当館所蔵資料を照合した結果、拓本全147点中127点は当館所蔵資料と一致した(一致した資料については、目録上備考欄に記載し、拓本の画像を掲載)。しかし、残りの20点については照合できなかった(他の文献等によると、日本銀行が銭幣館所蔵貨幣資料全点を譲り受けたわけではないとされており、こうした事情によるものではないかと考えられる)。

拓本の右上には書き込みがみられ、その内容は目録備考欄および第4表に記した通りであるが、分類名称を記したものと、特徴を記したものがあり、その記述方法には必ずしも統一性がみられない(分類等が付記された拓本に続く同じ種類の拓本について、「全上」と記されているケースと、同じ種類と思われるが無記入のケースとがある。本目録上では「全上」と記されたものについてのみ、その内容を備考欄に記した)。

書き込まれた分類について、拓本の掲載順に第4表に掲げた。この分類で特筆すべき点は、第一に分類名称は記されていないが、最初に銀銭の拓本29点、次に銅銭の拓本9点、次に銀銭の拓本8点が並べられており、第4表にある通り、ほぼ登録簿の古鑄の銀・銅銭、後鑄の銀銭と個体も一致する。つまり、田中啓文氏も、当館登録簿で後鑄の銀銭にあたる個体について、古鑄銀銭とは一線を画して考えていたことがわかる。

次に注目されるのは、銅銭について、当館登録簿での「古和同様」とは別に「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」という分類がなされていること、そして「新和同」を3期に画していることである。

拓本資料と当館所蔵資料で照合できる資料のうち、拓本資料の記載内容と当館登録簿分類で異なるケースがみられる。主な事例を以下に掲げる。

- ①当館登録簿で古鑄・銀銭に分類されている個体ID13が、銭幣館拓本資料では後鑄に分類。
- ②当館登録簿で後鑄・銅銭の「古和同様」に分類されている計6点について、銭幣館拓本資料では、個体ID52・54～57の5点は何も記載がなく、ID53が「銅色古和同ニ類ス」と記載。
- ③当館登録簿で後鑄・銅銭の「普通品」に分類されているもののうち、銭幣館拓本資料では個体ID206・208～213の7点が「銅色古和同ニ類ス」、個体ID207が「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」に分類。
- ④当館登録簿で後鑄・銅銭の「降和」に分類されている個体ID284が、銭幣館拓本資料では「和字離郭」。
- ⑤当館登録簿で後鑄・銅銭の「降和」に分類されている個体ID283が、銭幣館拓本資料では「細字」。

銭幣館拓本資料分類と郡司氏による当館登録簿分類は基本的な考え方はほぼ同じであるが、実際個々の資料に対する分類では多少の違いがみられる。

ただし分類は各個体の特徴のどこに重点を置くかにもよるため、例えば上記⑤のような分

類の相違は大きな問題ではないであろう。

なお田中氏が「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」と分類した資料については、鑄期等との関連からも成分分析を行うことなどでその分類の妥当性が明らかになる可能性もある。

## 5. おわりに

以上、貨幣博物館所蔵和同開珎について、当館登録簿分類と計測結果の概要を紹介し、当館所蔵資料の原所蔵者田中啓文氏と、当館資料の整理をした郡司勇夫氏の分類について紹介してきた。田中氏や郡司氏の古銭学的な和同開珎の分類が、当館所蔵の実物資料の拓本や写真などと結びついて公開されることで、新たな段階に入った古代銭貨史研究の一助となれば幸いである。

### [補足 - 1] 金属組成分析による検証

当目録備考欄において④とあるものは、岡田茂弘、田口勇、齊藤努「和同開珎銅銭の非破壊分析結果について」(日本銀行金融研究所「金融研究」第8巻第3号、1989年)において分析された資料である。

この分析の目的は、古和同・新和同の成分比較、新和同銭における銭種と成分比との関係であった。分析には国立歴史民俗博物館の和同開珎29点と当館の和同開珎15点を用いられた(分析方法は蛍光X線分析法)。

古和同銭はいずれも銅含有率が90%を越え、錫・鉛の含有率は1%以下のものがほとんどであった。

新和同銭の多くは銅含有率が77~91%(当館所蔵品)で、古和同銭よりも多くの錫・鉛を含有しており、上記文献では「古和同銭と新和同銭の鑄造時期あるいは産地に明確な違いが存在したことを示すものと考えられる。」と結論付けている。

古和同様のものの中で唯一分析された個体ID52は銅含有率91%と新和同としては多いが、錫6%・鉛2%と古和同群にはみられない値を示している。詳しくは同文献を参照されたい。

また本目録で古鑄銅銭と分類されている全10点は、斎藤努・高橋照彦・西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究 - 「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」(IMES Discussion Paper Series 02-J-30、2002年9月)において鉛同位体比分析がなされている。

その原料供給地について国立歴史民俗博物館所蔵の古和同銅銭3点の分析結果と合わせ、「古和同は、一部長登鉾山を含みつつ、於福鉾山や香春岳付近からの原料供給を受けていたと想定される。」としている。詳しくは同文献を参照されたい。

### [補足 - 2] 富本銭との関係

富本銭の法量について平均値で、外縁外径は24.4mm、内郭内径6mm、厚さ1.5mm前後、重量4.59gと公表されている。古鑄銅銭の平均値と比較的近い値を示しているといえよう。

公表されている成分分析結果(蛍光X線分析法による)によると、富本銭は主成分を銅、副成分をアンチモン(4~25%、平均値8%前後)とする銅-アンチモン系の合金である。一方、[補足-1]の文献中で分析された当館所蔵古和同銅銭3点では、アンチモンはいずれも微量の検出である。

### [補足 - 3] 錢幣館分類と計測データ

錢幣館拓本資料分類は大分類については、ほぼ当館登録簿分類と同じであるが、小分類は当館と異なる部分もある。そのため各分類毎に平均値を求めたが、分類毎の点数が少ないため明確な傾向は得られなかった。(特に新和同第1～3期の特徴を明らかにするべく試みたが、確定できる個体数が少ないこともあり、特徴を把握することはできなかった。)

唯一特徴的なものとしては第4表で「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」と分類された孔径比の平均が0.33と比較的大きく、重量も平均2.73gと全点の平均値に比して軽量であった。今後これらの分類・計測データと成分分析値との整合性を検討していく必要がある。

### [補足 4] 鑄造痕に関わる情報

錢幣館拓本資料の各拓本に書き込まれた情報(目録の備考欄に記載)の中で鑄造時の痕跡に関わるものがみられる。「鑄線」は、銭の表や裏面に線が見られるもので、鑄型にヒビが入り、鑄造時に銭に線状に現れた物である。また「重文」は銭文が二重に写し出されているもので、鑄型に母銭を置いた際に生じたものと考えられる。「センペン」(鏝辺)と記されたものは、轆轤作業の痕跡としているものである。その他、「鑄放」や2つの和同開珎がつながったいわゆるメガネ銭などを含めて、いずれも和同開珎の鑄造技術の検討の手がかりとなり得るものである。

「センペン」については、田中啓文氏自身が『錢幣館』11号で触れているほか、松村恵司氏が「和同開珎をめぐる諸問題」(『和同開珎をめぐる諸問題(一)』平成17年度研究集会報告書、2007年)において、いわゆる「古和同」の和同開珎の鑄造技術に関連して詳細に検討しており、当館所蔵資料についても、今後拓本記載情報の妥当性について他の出土資料などと合わせ、詳細な検討が必要である。

#### <主な参考文献>

- 岡田茂弘、田口勇、齊藤努「和同開珎銅銭の非破壊分析結果について」(日本銀行金融研究所「金融研究」第8巻第3号、1989年)  
 岡田茂弘「和同開珎銀銭について」(『郵政考古紀要21』、1995年)  
 郡司勇夫「和同銭談義」(『古泉』No.19、1956年)  
 郡司勇夫「和同開珎銭の鑄造」(『日本の科学と技術』No.196、1979年)  
 郡司勇夫編『日本貨幣図鑑』(東洋経済新報社、1981年)  
 齋藤努、高橋照彦、西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究 —「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析—」(金融研究所Discussion Paper J-Series No.2002-J-30、2002年)  
 田中啓文(金壹仙人)「私の和同銭観」(『貨幣』38号、1922年)  
 田中啓文「隸開和同開珎」(『貨幣』156号、1932年)  
 田中啓文「鑑定上から見た古和同銭の鑄造年代」「皇朝銭種の鑑定と分類」(『錢幣館』11号、1951年)  
 松村恵司「富本銭出土遺跡考」(『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集、2002年)  
 松村恵司「日本初期貨幣研究史略:和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」(日本銀行金融研究所「金融研究」第24巻第1号、2005年)  
 松村恵司・栄原永遠男編『和同開珎をめぐる諸問題(一)』(平成17年度研究集会報告書、2007年)  
 奈良文化財研究所『平城京出土 古代官銭集成Ⅰ』(奈良文化財研究所、2004年)  
 日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣 1』(東洋経済新報社、1972年)

(貨幣博物館 関口かをり)